

2022年10月30日  
九州連合長老会講壇交換 於都城城南教会  
牧師 乾元美（宮崎中部教会）

詩編 133 : 1

ローマの信徒への手紙 15 : 22～33

「共にいる喜び」

<会うこと>

今日、読まれた聖書箇所は、パウロがこれから訪問する予定の、ローマの教会の信徒たちに宛てた手紙の中の一節です。コリント滞在中に書かれた手紙だと考えられています。

遠く離れたローマには、すでに福音が宣べ伝えられ、イエスさまを信じる人々の群れ、教会が生まれていました。しかしパウロ自身は、まだローマへ行ったことがなかったのです。

パウロは23～24節で、ローマの教会の人々に会うことを切望していた、と書いています。そして、イスパニア、今で言うスペインのことですが、そこへも伝道に行きたい。その前に、途中でローマの教会を訪ねて、共にイエスさまを信じ、救われた兄弟姉妹と、共にいる喜びを味わってから、イスパニアへと送り出してもらいたい。そうパウロは願っていたのです。でもその前に、パウロはエルサレムの教会に行って献金を届けなければならない、と言っています。

パウロは、自分自身が、教会の兄弟姉妹たちとの交わりを大切にしたい、というのはもちろんのこと。自分が橋渡し役になって、教会同士も良い交わりを築き、各地の教会同士が、喜びも苦しみも分かち合って、互いに祈り合って、一つになって歩むことを願っていました。

そしてわたしたちは今も、パウロの時代と変わらず、この教会同士の交わりをととても大切にしているのです。

今は、コロナ禍にあって、ぐっと人と人が「会う」という機会が減ってしまいました。しかし、直接「会う」ということはとても大切です。そこでは、場所も、時間も、温度も、匂いも、音も、この雰囲気も、共有することが出来ます。手紙や、メールや、電話や、オンラインよりも、ずっとずっと相手のことをよく知ることができるのです。

今年の夏、全国連合長老会の中高生修養会があった時に、基本的にはオンラインでプログラムが行われたのですが、一部の地域では、中高生たち何人かが一つの教会に集まって、現地から皆でオンラインに参加することが出来ました。

そのプログラムで、最初にアイスブレイクとあって、お互いに打ち解ける目的で小さなゲームをしました。5～6人ずつでグループになって、共通点をいくつ探せるか、というゲームです。オンラインで、画面越しに話し合うグループは、どこも5～6個しか共通点が見つけれませんでした。しかも、「教会に行っている」とか、「今朝は朝食を食べた」とか。そんな、絶対に誰でも当てはまるような共通点です。でも、現地で集まって顔と顔を合わせて

いるグループは、同じ短い時間で、何と23個も共通点を見つけました。

それで改めて、目の前にいるのといないのとは、コミュニケーションの深さに雲泥の差があることを思い知らされたのです。

わたしたちも、顔と顔を合わせることで、何より礼拝を共にすることで、お互いの教会の様子をよく知ることが出来ます。今日はそれぞれの長老も、それぞれの礼拝に出席できることになりました。皆さんにも、わたしたちを通して、宮崎中部教会の様子をぜひ知っていただきたいと思います。また、帰ってきた牧師や長老から、中部教会の様子も伝えられることでしょう。

そうして、さらにわたしたちが、お互いをよく知り合い、お互いに祈りを深めていけたらと思います。いつか信徒同士が会う機会もあると良いですね。祈る時に、顔も雰囲気も知らないのと、一人、二人でも顔が思い浮かぶのとでは、祈りへの思いの深さも、変わってくるに違いありません。

そして、困難も打ち明け合い、苦しみも担い合い、喜びも共に分かち合うことが出来る、そんな教会同士の交わりを築いていけたらと、心から願っています。

#### <交わり、共有>

さて、今日の聖書箇所は、そのような教会の交わりのことを覚えて選ばれました。

さっきも申し上げましたが、「ローマの信徒への手紙」は、パウロがコリントにいるときに書いた手紙だと考えられています。26節には「マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意した」とありました。マケドニア州とアカイア州は、今で言うギリシアの辺りですが、このアカイア州が、コリントの町がある地方です。

このアカイア州やマケドニア州の教会は、異邦人たちが中心となっている教会です。そんな彼らが、遠く離れた地の、ユダヤ人中心のエルサレム教会の貧しい人々を援助することに、喜んで同意して、募金を集めたといえます。

パウロはそれを確実に手渡すために、行きたいと願っているローマやイスパニアとはまったく反対方向にあるエルサレムにまず行って、異邦人の教会とエルサレム教会との間に、良い交わりを築きたいと願っているのです。

ところで、「交わり」はギリシア語で「コイノニア」という言葉です。これには他にも「共同体」また、「共有する／分かち合う」という意味もあります。つまり、一つのものを共有したり、分かち合ったりしている共同体、ということです。

実は26節の「貧しい人々を援助することに喜んで同意した」というところの「援助する」という言葉。ここに「コイノニア」という言葉が使われています。援助するということは、自分たちの持っているものを、他の人々と共有すること、分かち合うこと、ということなのでしょう。

そして 27 節には、「彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります」とパウロが語っていました。

ここにある、「霊的なものにあずかった」の「あずかった」という言葉も、コイノニアという言葉です。ユダヤ人の霊的なもの、それはつまり、神の民イスラエルを通して与えられた、神の御子イエス・キリストの救いのことです。この救いの恵みは、今や使徒たちやパウロの伝道によって、ユダヤ人ではなかった異邦人にも伝えられ、分け与えられたのです。

ユダヤ人も、異邦人も、同じ神さまの救いの恵みに与った。イエスさまの救いを共にいただき、お一人のイエスさまに共に結ばれた。大胆に言えば、救いにあずかった者は、みんな一緒にお一人のイエスさまを共有している、と言っても良いのです。

すべての教会は、このお一人のイエスさま、一つの聖霊、一つの神さまの救いに、共に与り、共に恵みを分かち合って存在している者たちの共同体です。

だからこの共同体に属するわたしたちは、他のすべてにおいても、分かち合うこと、共有することに召されています。それは、肉のもの、つまり物質的なものやお金など地上のものであっても。また、喜びも、悲しみも、困難も。あらゆることを共に分かち合うように召されている。それが教会の共同体なのです。

ですから、異邦人の教会は、自ら進んで、喜んで、自分たちに与えられているものを、エルサレム教会と分かち合おうとしました。しかし、それはまた、義務でもある。そもそも、それは当然のようになされるべきことでもあるのだ、とパウロは語っているのです。

救いの恵みも、地上での歩みに必要なものも、わたしたちは自分で得て、自分で持っているわけではありません。すべては神さまから与えられたものであり、それは本来、兄弟姉妹と共有すべきものなのです。

ですから、与えられている恵みを独り占めしたり、分かち合わなかったり。あるいは、貧しい人や苦難の中にある人に無関心でいるのは、共にイエスさまの救いを共有している、この教会の群れの中では、教会同士では、あり得ないことなのです。

しかし、わたしたちには実際、中々その義務を果たせていない現実があります。だからこそパウロも、このことをわざわざ手紙で書いて、教えなければならなかったのです。

イエスさまに救われた人が、救われた群れが、孤立するということはありません。

わたしたちは、教会で洗礼を受けて、イエスさまの体に結ばれて、救いに与ります。それは、イエスさまの一つの体の一部分になる、ということであり、イエスさまに結ばれたお互い同士も、一緒に結ばれるということです。恵みも、喜びも、苦しみも、弱さも共有し、分かち合う群れの中に入る、ということなのです。

みな、イエスさまの体に結ばれて、一つの体です。初めから、わたしたちは繋がっている。初めから、一つの交わりの中に置かれているのです。

それなのに、わたしたちはいつしか目に見える、目の前のことだけ、自分のことだけ、自分の教会のことだけに捕らわれて、視野が狭くなってしまいます。見えない体の部分のことを、すぐに忘れてしまいます。

離れた土地で、小さな群れで、他の教会との交わりがなければ、その教会はどんどん縮こまり、弱っていくでしょう。

また、教会の規模が大きければ、そこだけでやっていけるから良い、というものでもありません。そのような教会は、パウロが言ったように、他の教会を援助する、恵みを分かち合う「義務」があります。同じ一つの体なのに、右手だけ太って、左手だけやせ細っていく、なんていうことはあり得ない、おかしいことなのです。

わたしたちは、一つの体として、すべてを共有していくことでこそ、弱さが覆われ、欠けは補われ、傷は癒され、体全体として、ますます健やかになることが出来ます。そこに、生き活きとした信仰が育まれ、さらに恵みも、喜びも、力も、増し加えられていくのです。

だからこそ、わたしたちには目に見える交わりが必要です。イエスさまにあって、一つの体に結ばれているとの、確信を与えられることが必要です。

会って、共に過ごして、共に祈って。喜びを分け合って、苦しみを分け合って、恵みを分け合って、一緒に歩いていくこと。そのような交わりが、教会を築き上げ、生き活きと成長させていき、さらに人々を福音へ招く、伝道の力となるのです。

#### <祈りの共闘>

そして、この交わりには、祈りが欠かせません。誰かのために祈ることは、自分も祈られるということ。誰かを力づけることは、自分も力づけられるということ。

パウロは手紙の中で、ローマの教会の人々に、自分のために祈ってほしいと願っていました。30～32節にはこうありました。「兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください。」

パウロの、エルサレム教会へ献金を届ける旅は、大変な困難が予想されていました。

もともと、律法に厳しいユダヤ人であったパウロは、イエスさまを救い主であると信じた後は、他のユダヤ人たちから裏切り者扱いをされ、迫害されるようになりました。

また、エルサレム教会でも、イエスさまを信じたユダヤ人たちが、他のユダヤ人から迫害を受けていました。そこにパウロが帰ってくる。パウロが攻撃の的になることはもちろん、パウロを受け入れるエルサレム教会も、さらに酷い迫害を受けるかも知れません。パウロの献金を届けるための訪問は、エルサレム教会の人々にとっては、もしかすると有難迷惑と思われるかも知れなかったのです。

パウロはエルサレムで、命を狙われるかも知れない上に、教会から歓迎されないかも知れない、という心配がありました。

しかも、エルサレム教会の中では、言葉の違いで軽んじられる人々がいたり、異邦人のキリスト者を受け入れようとしない、ユダヤ人のキリスト者もいたようです。

だからこそパウロは、自分自身が命の危険に晒されてでも、異邦人教会からの援助を届けて、エルサレム教会との間に、主にある喜びの交わりを築かせ、教会の中も、教会同士も、何とか主にあって一致してもらいたいと願っていたのです。

そのために、パウロはエルサレムへ行くことを決心し、そしてローマの兄弟姉妹に願いました。「どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください。」

しかもパウロは、「わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします」と言いました。イエスさまの名によってお願いする。霊が与える愛によって願う。しかも、この「願う」という言葉は、むしろ「勧める」と訳してよい言葉です。つまり、これはイエスさまの名によって、祈ることを勧めます、と言っているのです。パウロのために、兄弟のために、教会のために祈ることは、イエスさまのために、主の御心のために、祈ることと同じです。

そしてパウロは、「どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください」と言いました。この「熱心に」という言葉。これは、単に一所懸命、ということではありません。これは、苦しみ悶える、という言葉です。特に戦いにおける苦しみです。一緒に苦しみ悶えて祈ってほしい。一緒にこの苦しい戦いに加わって欲しい。自分の苦しみの戦いを、祈りによって共に担って欲しい。パウロはローマの兄弟姉妹にそう願っているのです。

誰かのために祈ること。教会のために祈ること。それは、一緒に戦うことだということです。

信仰の戦い。世の困難との戦い。弱さや罪との戦い。一人では、とても戦いきれません。一つの教会では、とても担い切れません。わたしたちは弱いのです。小さいのです。貧しいのです。でも、わたしたちは互いに祈り合うことが出来ます。ある人は、「教会は祈りの共闘（共に戦う）をする集団だ」と言いました。共に祈ることは、共に戦うことです。

そして、共に神さまを見上げて、共に神さまの御心を必死に問いかけていくことです。

そして、この祈り合う群れの中心にこそ、イエスさまご自身がいて下さいます。

このように、一緒に、熱心に祈り合う交わりにこそ、生きた信仰があり、生きた教会があり、わたしたちの、本当の生きた交わりがあるのです。

## <計画>

そして、この祈りを始めから最後まで聞き届けて下さるのは、成し遂げて下さるのは、イエスさまご自身であることを忘れてはいけません。

今このパウロの手紙を読んでいるわたしたちは、パウロの計画が、まったく思うようにはいかなかったことを知っています。パウロの計画は、神さまの福音を宣べ伝えるための計画、教会の一致のための計画、イエスさまの救いの御業に仕えるための計画でした。しかし、そ

うであっても、神さまのご計画、神さまの御心、神さまのなさる御業は、パウロの思い描く計画とは違う方法だったのです。

パウロは確かに、異邦人の献金をエルサレム教会に届けることが出来ました。しかし、現地のユダヤ人たちが、やはりパウロの命を狙ってきました。それでパウロは、ローマ兵によって、囚人として護送されてローマに来ることになったのです。

しかも、パウロはローマで、皇帝ネロの許、殉教したと言われていています。イスパニアに伝道に行く計画は、とうとう叶うことはありませんでした。

…パウロは、志半ばで亡くなってしまった、ということなのではないでしょうか。そうではありません。神さまのご計画は、始めて下さるのも、進めて下さるのも、終わらせて下さるのも、すべて神さまなのです。ですから、その神さまの、人の思いを大きくこえるご計画を、御言葉を通して、祈りを通して見つめながら、自分に与えられた場所で、与えられた務めを走り通す。それが、パウロの歩みでした。

自分の思っていた仕方とは違っていても、パウロの目的そのものは、常に神さまの御心に従う、ということだったに違いありません。神さまのご計画に用いられるのであれば、パウロは与えられた状況を受け入れ、そこで精一杯神さまに仕えたのです。

でも、そのようにして従っていくためにこそ、パウロ自身が熱心に祈っていたことはもちろんのこと、共にパウロの戦いの苦しみを共にしてくれる教会の祈り、兄弟姉妹の祈りの援助が、交わりが、必要だったのです。

その祈りが、その交わりが、パウロを励まし、慰め、力づけ、あのように大胆な伝道を支えていたに違いありません。

わたしたちも、わたしたちが何かを成し遂げたり、完成させたりできるわけではありません。思ったことと違うこと、上手くいかないことはたくさん起こります。でも、神さまの良いご計画がある。それを神さまが成し遂げ、神さまが完成させて下さる。そのことを信じて、共に祈りながら、自分たちに与えられた場所で、神さまに仕えていくのです。

<祝福に満たされた中で>

さて、29 節ではパウロが、募金をエルサレム教会に確実に手渡したら、ローマのあなたがたのところに行きますね、と言ってこう続けます。「そのときには、キリストの祝福をあふれるほど持って、あなたがたのところに行くことになっていると思っています。」

実際には、命からがら、囚人としてローマへ護送されてきたパウロです。思っていたローマ訪問とは、全然違う形だったでしょう。このような状況で、パウロはキリストの祝福をあふれるほど持って、ローマへ来ることが出来るのでしょうか。

…それはもちろん、イエスです。パウロは、罪を赦され、イエスさまに救われた人です。どのような状況にあっても、イエスさまの祝福がパウロを離れることはありません。

「キリストの祝福をあふれるほど持って」とありますが、ここは正確に訳すなら、「キリストの祝福に満たされている中で、わたしはあなたたちのところに行く」となります。

パウロはすでにずっと、キリストの祝福に満たされているのです。それは、持ったり、手放したり、失われたりすることなく、もう祝福が、パウロを覆って、満たして、包み込んでしまっているのです。

そのキリストの祝福の中で、パウロはあっちへ行き、こっちへ行く。パウロが行く所はどこへでも、このキリストの祝福が伴っていきます。そして、行く先々で、その祝福にあって、人々と共に、喜ぶことが出来るのです。

わたしたち、救われた一人一人が、そのような存在です。キリストの祝福に包まれて、覆われて、今、礼拝をしている。そして、ここから出て行って、家で生活をしている。社会で暮らしている。そこで誰かと会うならば、その人は、わたしたちを通して、わたしたちを満たしているキリストの祝福に、必ず触れることとなります。わたしたち一人一人もまた、この満たされた祝福を、誰かと共有するために、遣わされているのです。

そしてパウロは、このようにキリストの祝福に満たされつつローマへ行くから、32 節で「こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことが出来るように」祈ってほしい、と言っています。

この「憩い」とは、ただ休んだり、ゆっくりする、というようなことではありません。これは、共に新たな力を得る、共にリフレッシュする、という意味の言葉です。主にある交わりは、喜びであり、また憩いです。交わりは、わたしたちが共にあずかることが出来る、新たな力そのものなのです。

今日も、この交わりを通して、わたしたちは共にいる喜びを味わい、また共に祈り合うことが出来ます。共に戦い、共に助け合い、共に恵みを分かち合う兄弟姉妹がいることを、確かにされ、強められます。

そして、わたしたちは、共に憩って、共に新しい力をいただいて、同じキリストの祝福に満たされて、また、それぞれの場所へ遣わされていくのです。

## 【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、お一人の御子イエスさまの救いに、一つの恵みに、共に与り、また共にすべてを分かち合う交わりに召されています。今日、そのように共に主に結ばれた、都城城南教会の兄弟姉妹と共に、礼拝をささげ、恵みを分かち合う時、共に熱心に祈る時、豊かな交わりの時を与えられましたことを、心から感謝いたします。

どうか、これからもいただいた交わりを大切にしつつ、キリストの祝福に満たされつつ、共に与えられた信仰に固く立ち、共に祈り、共に戦い、共に喜び、共に苦しみ、神さまの御心に、共に従っていくことが出来ますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 403 「かみによりて」(54年度版讃美歌)

【祝祷】

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン